

なおコブシ中にはキタコブシ *Magnolia Kobus* DC. var. *borealis* Sarg. として葉、花等がコブシに比し大形のものがあり、北海道から本州北部中部の日本海岸地方に分布する。

この事からすればキタコブシから北海道、本州、四国、九州、南部朝鮮に分布するコブシが生じ、コブシから更に本州、四国、九州に産するタムシバが分化したものと考えられる。

かくの如く *Magnolia* 属は北方より次第に南下しつつ分化したものであるが、この南下と共に次第に葉の大きさが小となり且つその巾が狭くなっている事は注目に値する。又同時に花、集果も次第に小さくなって行く様である。

The essential oil from the leaves and branchelets of *Magnolia Kobus* DC. contains Pinene (?), Cineole, Citral (7 %), Methylchavicol (the main constituent), and Eugenol (small quantities); that of *Magnolia, salicifolia* Maxim. contains Hydrocarbon (3 %), Cineole (1 %), Citral (traces), Anethol (73 %), and Anisaldehyde (7 %).

These differences in the composition indicate that *M. salicifolia* was differentiated from *M. Kobus*.

#### 文 献

- 1) Good: Ann. of Bot. **39**: 409 (1925). 2) 大井: 日本植物誌, 551 (1953); 牧野, 根本; 日本植物総覧, 356 (1931). 3) 大井: 日本植物誌, 550 (1953). 4) Schimmel & Co.: Schimm. Ber. Oct. **1903**: 81; Apr. **1908**: 56; Charabot, Lalone: C. r., **146**: 183 (1908); Bull. Soc. Chim., IV, **3**: 381 (1908); Gildemeister: "äth, öle," II, 558 (1929). 5) 朝比奈, 中村: 薬誌, 1267 (1908). 6) Matsuura, Watanabe: J. Sci. Hiroshima Univ. Series A, **16**: 169 (1952).

#### 〇アカハナワラビの紅変について (行方富太郎) Tomitaro NAMEKATA: On *Botrychium nipponicum* Makino

私は 1953 年 2 月武蔵国朝霞町根岸に行き 40 年の昔牧野先生が始めて採集命名せられたアカハナワラビを採集・続いて同じ年の 3 月成田市に近い下総国富里村中木戸の杉林内で同品を採集・1954 年 11 月武蔵国恩方村の日本シダの会関東支部採集会に於てもその一株を採集することが出来た。

本誌 Vol. 1. No. 2 に発表せられた牧野先生の本種に対する原記載によると、その裸葉の紅土色 (lateritious-coloured) は葉の萌え始めからそうした色のように一寸間違われ易いが、それはたまたま牧野先生の採集せられたのが 1915 年の 1 月であつて丁度裸葉が紅変していた最中だつたからであろうと思われる。私は根岸産のものと富里産のもの

とを、自分の Fern Garden 内に培養して2年間その生態を観察してきたが晩夏の萌々始めと翌春の枯倒前とは紅土色を呈することなく普通の緑色であつた。裸葉の紅変は11月中旬頃より始まり1月~3月には全体が紅黒く変色する。そして3月下旬頃から再び緑色に変色して4月に入つて枯倒するのである。この変色は主に気温の高低によるものらしく、日照の有無はあまり関係がないようである。一日中木洩れ日位いしか当らない林内のものでも11月~3月の間は紅変している。オオハナワラビ (*Botrychium japonicum* Underwood) とは全く別種でオオハナワラビの裸葉もその周辺が赤褐色に変化するが、その色調を異にしている。緑色のときでも葉型は羽片が細長く幅が狭く鋸齒が深し葉脈もより緻密で顕著であるから区別出来る。更に生態的に見て実葉柄はオオハナワラビに於ては翌年の8月頃まで枯倒しないがアカハナワラビに於ては降霜期即ち11月下旬頃になるといち早く枯倒してしまうことが大いに異つている。尙裸葉もオオハナワラビのように翌年の夏までは生きていないで4月頃に枯れる。

オオハナワラビを採集するときによく前の年の裸葉が黄変して附着していることがあるが、アカハナワラビにはそういうことはない。アカハナワラビの裸葉の紅変はフユノハナワラビ (*Botrychium ternatum* Swartz) の中にも現われる。紅変するものと全く紅変しない緑色のものと二種が入り交つて下総国成田市山口の松林内に自生している。フユノハナワラビの実葉柄の枯倒する時期はアカハナワラビと同じである。アカハナワラビの中にもまた紅変せず可成り緑色を残して僅かに紅ばんでいるものもある。この共通の特質の上からみてアカハナワラビとフユノハナワラビは両者が近縁の種であると思うが識者の御示教が得られたら幸いである。 (千葉県成田市 [ ])

○コウヤカミツレ (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Anthemis tinctoria* in cultivation.

昨年7月東京のハナヤでシュンギクとよばれながらシュンギクでない切花を買つた。35 cm 位に切つた一見シュンギクのようにも見える花である。全体が灰白に見える。それは毛のためで、多少分枝して花をつけるが、分枝は大い長さが20-25 cm で、頭花の柄とそういうべき部分、すなわち枝の上部で葉をつけない部分、つまり花莖部は長さ10-15 cm. そのために頭状花は長い花梗をもつているように見える。葉は楕円形で長さ2.4 cm (切花で) 5羽状深裂、裂片は更に深裂し齒状を呈し、裏面に白軟毛あり。総苞鱗は長楕円一披針状、辺縁膜質、綿毛を被り、頂部汚褐色。頭花は径4 cm. 花床は中実、舌状花は淡黄白色、3齒。筒状花は黄色で披針形の苞片と殆んど同長、柱頭超出。こんなところで戸籍しらべをしたら *Anthemis tinctoria* L., すなわち明治の先輩がコウヤカミツレと既に命名されたものの淡黄色のもので var. *pallida* DC. であるとわかつた。和名は恐らく学名に因んだものだろう。明治時代に来て姿を没し、またこの頃来たものであろう。